

な見る甘く夏山 牙むく

トムラウシ遭難

8人死亡15年

大雪山系トムラウシ山(2141m)、十勝管内新得町などで、ツアーガイドを含む登山者8人が低体温症で死亡した事故から16日で15年となる。夏山登山での遭難は今も後を絶たず、道内では過去10年で計22人が遭難死した。大雪山系では近年、軽装備での登山者が目立つほか、避難小屋では定員を超える日が続き、山岳関係者は遭難事故の風化を懸念する。

目立つ軽装 関係者風化を懸念

「意識がもうろうとし、足が思うように動かなくなった。あの時は低体温症という言葉も、怖さも知らなかった」。15年前のツアーに参加し、救助された浜松市の真鍋記余子さん(70)は当時を振り返る。

軽度の低体温症になった真鍋さんは、防寒着を重ね着してしのいだ。ほかの登山者は猛烈な暴風で防寒着を着ることもできず、雨にさらされて低体温症で亡くなった。道警によると、道内で2014〜23年の7、8月、登山中に遭難した人は計384人で死者は22人に上る。このうち低体温症になった遭難者は8人、うち死者は3人だった。道警地域部は「北海道では本州の山と比べて同じ標高でも気温が低

く、真夏でも急に気温が下がる」と注意を呼びかける。

夏山での低体温症のリスクはトムラウシ山の遭難事故が契機となり、認識されるようになった。多くの旅行会社は事故後、登山ツアーの上限人数を減らし、悪天候に備える予備日の設定などの対策を進め、近年は多数の犠牲者が出る遭難事故は、道内で起きていない。

集め、専門誌も出ている。緊急時に備えるテントを含めた装備ごとの軽量化を意味するが、誤って「軽装化」と受け止め、テントなどを装備から省く登山者が相次ぐ。

今年10日、トムラウシ

山の登山口ではTシャツやハーフパンツ姿で、小さなリュックを背負った登山者が目立った。軽装の男性の一人は「天候には十分気をつけている」と話したが、テントなどを携行して日帰

り登山した横浜市の会社員森太郎さん(52)は「頂上付近は強風で低体温症のリスクが頭をよぎった。奥深く険しい山だった」と話した。

トムラウシ山は2000m級の山でアップダウン

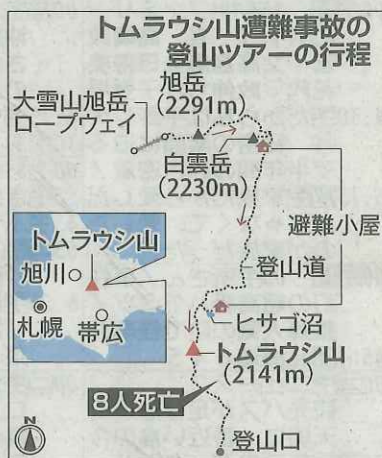
Tシャツ姿

ただ、北海道山岳ガイド協会顧問で、事故後に現地調査をした大橋政樹さん(72)は「新得町は遭難事故は確実に風化している」と感じている。

近年は「ウルトラライト(超軽量)」と呼ばれる登山スタイルが人気を



トムラウシ山の登山口で事故の風化を懸念する北海道山岳ガイド協会顧問の大橋政樹さん



トムラウシ山遭難事故 2009年7月16日、トムラウシ山で、東京の旅行会社の登山ツアーに参加した50〜60代の男女15人とガイド3人が暴風雨で遭難。愛知県などの客7人とガイド1人が低体温症で死亡した。ツアーは旭岳側から入り、トムラウシ山などを縦走する計画だった。道警は17年、業務上過失致死傷容疑で、旅行会社の元社長とガイド3人を書類送検したが、釧路地検は不起訴処分とした。

ンが激しく、天候がすることも珍しくなガイド協会顧問の大橋さんは「最低でもテント非常食、防寒用のアシートを持参するだ」と訴える。